

## 「羽化の失敗」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

今の時期、子どもたちは、アゲハのサナギをよく探して、学校に持ってくる。幼虫のうちにつかまえて、容器の中でサナギになってしまったものもある。そういう場合、狭い容器では、羽化に失敗することも多い。そこで「サナギホルダー」を作って、羽化を成功させるのだが、間に合わない場合もある。



先日も、丸いサクランボカップのような容器の中でアゲハが羽化してしまった。周囲にいた子どもは、「羽化の一瞬」を目撃できたと、とても興奮していた。しかし、アゲハにとっては場所が悪かった。容器が浅すぎて、展翅に失敗してしまったのだ。子どもたちは、「がんばれー！」と応援していたが、ダメだった。



翌日になっても左後翅を開けず、ついに飛ぶことはできなかった。女の子が涙を流しながら「かわいそう、

かわいそう」と、手の平に載せて見守っていた。そのうち一人が、涙声で私に声をかけてきた。



「先生、畑の近くのツツジのお花、少しとってきてくれますか?」「アゲハにあげるの?」「そう、このちようちよ、羽化してから一回もお花の蜜吸ってなくて、かわいそう。飛べないけど、蜜だけ吸わせてあげて。」

弱ったアゲハが、蜜を吸うわけないとは思ったが、私は子どもの一途な思いに心を動かされて、花がたくさんついたキリシマツツジの枝をとってきてあげた。



女の子たちは、花を水に生けて、カラスにやられないようにと籠をかぶせて、再び見守っていた。驚いたことに、アゲハは這いあがって蜜を吸っていた。しかしその日の午後、力尽きて死んでしまった。

「飛ばせてあげられなくて、ごめんね。」

「でも、少し蜜が吸えてよかったね。」

小さな命に対する、子どもたちの無性なやさしさを感じた出来事だった。